

## 「身近な災害を通して学んだこと」

高松市立桜町中学校 2年 正木 雅 さん

私は夏休みになるとあの出来事を思い出します。小学校六年生の夏。夏休みを目前にひかえたあの日「西日本豪雨」がおきたことを。

私の祖父母の家は愛媛県宇和島市にあります。二〇一八年、七月に宇和島市は西日本豪雨にありました。祖父の持っている山が被害にあったり、愛媛県内では死者が二十九人出たりするなどとても大きな水害となりました。また、大規模な河川のはんらんが起り、多くの家屋が浸水被害を受けたり、土砂崩れが起こったりしました。なぜ、このような大きな災害となってしまったのでしょうか。私はこれまでテレビをでみた情報をもとに、どのようにすれば被害を、また、被害後の暮らしに「安心・安全」をつけかわえられるか考えました。その方法は三つあると思います。

一つ目は、被害の可能性について考えることです。豪雨の際は、大雨が原因となり派生して起こる土砂災害や河川のはんらんなどの二次災害にも十分な警戒をする必要があると思います。西日本豪雨でも土砂災害が大きな被害をもたらしました。地質的にもろい斜面や、木々が生えておらず山肌がさらされている場所は、土石流や地滑りなどが起こりやすいため注意が必要だそうです。また、河川のはんらんも大きな災害となります。すべての河川で発生する可能性がありますが、過去に同じような災害があったところは要注意です。さらに、ダムの決壊も大雨の二次災害として注意が必要です。決壊すると大規模なはんらんにつながります。いずれの災害も、ハザードマップなどで想定被害として予測されています。実際に西日本豪雨でも岡山県での浸水はそのほとんどが予想範囲と一致していました。二次災害への対処のためにもそれらはしっかりと把握しておくことが大切だと思います。

二つ目は、備えです。西日本豪雨では、広範囲に被害が出たため、復旧にはたくさんの時間がかかりました。今後、そのような事が起きてしまった場合、自分たちで用意できるもの、それは非常用持ち出し袋です。わが家でも家族分の持ち出し袋を枕もとへ置いてあります。これらは今までの災害を通して必要だというものを情報を集めて作りました。豪雨だけに限りませんが、いざというときすぐ逃げられるように非常用持ち出し袋は常に用意しておく必要があります。自然災害では刻一刻と状況が変わっていくため、逃げ遅れることが命の危険に直結します。いち早く避難するためにも、非常用持ち出し袋は必須だと思います。また、ハザードマップ、避難経路、テレビ、ラジオなどの情報収集をすることも大切です。事前に得られる情報、最新の情報を組み合わせればやく行動することが命を守る上で有益になると思います。

三つ目は、協力することです。今ではSNSを使う人がたくさんいます。SNS内で水や食料、シャワーが使える、食料や物資などを配布している場所などをあげて拡散することでテレビよりも早く情報を届けることができます。実際に西日本豪雨のときにも、SNSを使い情報を伝えあっていました。また、離れたところから材料を寄付し、小学校でのお弁当を無料配布したり、ボランティア団体の方々がそうじや片付けなどの手伝いをしたりしていました。私はこのようなときこそ、みんなが力を合わせる大切さを知りました。「被害にあったのは一人だけじゃない。」「みんな同じ気持ちなんだ。」ということを考え、協力してくれる人に「ありがとう」の気持ちを持つことが大切だと思います。

今回の西日本豪雨は、祖父母の町が被害にあったこともあり、とても身近に感じた災害でした。自分で考えたことを生かし、これからの災害につなげていきたいです。今、宇和島市は、たくさんの方々の支援を受け、ほとんどの人が普通の生活を送ることができています。今もまだ、祖父母の家に帰るとあのつらい景色を思い出します。だからこそ、今回の経験を元に、自分にできることをして安心して暮らせるようにしていきたいです。